

スクラップ・アンド・ビルド

(ヨハネ二・二二～三二)

ステレオタイプということばがある。判で押したように多くの人に浸透している考え方や先入観、あるいは固定観念といったものを指すのだが、その語源は印刷術のステロ版にあるという。活字を集め、それをはんだ付けして固め、その版を使って印刷することから考えられたのだそうだ。洋の東西を問わず人間は同じようなことを考える。面白いものだ。時にイエス・キリストもある意味ステレオタイプ化されたフィギュアである。長身瘦躯にして金髪、青い目に口元には髭といった外観は勿論、いつもにこやかで優しく、暴力とは無縁の柔和な人というイメージが多くの人に刷り込まれているのだ。だがどうだ。今朝読んだ箇所にあるイエスときたら、正に大暴れではないか。鞭を振り回し、両替台を蹴倒して「それを持ってすぐ出ていけ」と言い放つイエスの頭髪は正に「怒髪天を衝く」のごとくであったと思われる。以下、ここに記されているイエスの行動について二つのことを考えてみたい。

一、きよめるイエス

ガリラヤのカナで最初の栄光を現したイエスは弟子たちと共にエルサレムに進出した。時は過越しの祭。エルサレムはローマ国内の諸国に離散した（一説によれば四百万人！）ユダヤ人たちのコミュニティから聖なる都を目指して巡礼する者でこつたがえしていた。「ヒト・モノ・カネ」などといったことばもあるが、人のいる所に物が集まり、そこから経済活動が活発化するのには世の常。巡礼者がめざした神殿の傍には神格化された皇帝の肖像が刻まれたローマ貨幣を刻んだ像を作らせないユダヤの神に相応しい貨幣に交換する両替商や、いけにえの動物を売買する商人たちの店が軒を連ねていた。門前町の風情がそこにあつたと考えると解りやすいだろう。

ところがイエスはその賑わいを喜びはしなかつた。それどころか、何と細縄で鞭をつくつて商人たちや動物たちを宮から追い払つた。なぜそんなことをしたのだろう。それは「わたしの父の家を商売の家としてはならない。」からである。最初は巡礼者の便利のために始まつたかもしれない。だが何時しかそれはビジネスになり、商人たちは旅人達の状況を見こして暴利をむさぼるようになつた。イエスは自らの父の神への礼拝の場所での商売、しかも必要以上に儲けることを許さなかつたのである。

二、こわす「イエス」

というわけでこの箇所は伝統的に「宮清め」と呼ばれ、ヨハネ福音書においてはエルサレムにおけるイエスの最初の働きとして記されている。しかしここで福音書記者が言いたいことは「宮清め」に留まつていないことに注意しなければならぬ。

イエスの狼藉（！）ぶりに業を煮やしたユダヤ人たちの「こんなことをするんだらたら、どんなしるしを見せてくれるんだらうな」という非難に対しイエスが言つたことは衝撃的であつた。「この神殿」とはヘロデ大王によつて大規模増築が行われたものであつたが、ヘロデ大王は建築狂として有名であり、この神殿の前にも多くの建築を手がけていた。だが彼は今まで以上の情熱をこの神殿造営に注いだ。それによつて自らの名を永遠のものにしようとしていたからである。それはモリヤの山を神殿に造り変えるという壮大なプロジェクトであり、城壁の石一つの重さはおよそ二八tという途方もない大工事であつた。この四六年の月日をかけてなお造営中の神殿を壊し、なんと三日で建てなおすとイエスは言つた。もつとも福音書記者はイエスの真意はイエス自身の復活にあるとしているが、ユダヤ人たちは額面通りに受け取つた。だがどちらにしても人間には「不可能」なことであることは同じだ。イエスは

人間の手による礼拝の場である神殿を一度完全に破壊し、それに代わる新しい礼拝の場として神の力によつて復活されたご自分のからだを提供しているのだ。

* * *

以下は木曜に尋ねてきた教え子との会話の一部。「先生のオフィス、来る度に少しずつ変わつてますね」「そうだね。絶えず進化してつてわけだよ」そんな私のオフィスの最近の変化はフィンランドの巨匠、E・サーリネンの名作椅子の導入である。彼は建築家としてもつとに有名である。代表作の一つはニューヨークのJ・K・ケネディ空港の第五ターミナルビル。長らく使用されていなかったようだが、この度リノベーションをして高級ホテルに生まれ変わるといふ。アメリカの歴史登録文化財なのだからこうした修改造築によつて延命するのは良いことだ。だがどんなに素晴らしいリノベーションだとしても、それはリノベーションに過ぎないとも言える。イエスの宮清め。それは単なる大掃除を越えた新しい礼拝の創造を予感させる出来事であり、主の十字架と復活という究極のスクラップ&ビルドによつてそれは達成された。人間の手によらないキリストのからだ、今日も諸国の聖徒たちと共に礼拝できる恵みを噛みしめようではないか。